

ユダは、やって来るとすぐにイエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。人々は、イエスに手をかけて捕らえた。（マルコ福音書14章45節～46節）

「私は毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたがたは私を捕えなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。（マルコ福音書14章49節～50節）

主イエスはゲツセマネで、「この杯を私から取りのけてください」と、十字架の苦しみから逃れたいと魂を注ぎ出して祈り続けられた。その祈りは、「しかし、私の望みではなく、御心のままに」という祈りに昇華された。そして、十字架の死が神の御心であると、これを受け入れる心が定まった。弟子たちには、人間のために苦しむ私を凝視し、目を覚ましていなさいと主イエスに言われたけれども、弱さのために眠り込んでいた。三回目の祈りを終えた後、「まだ眠っているのか。休んでいるのか。もうよかろう。時が来た。人の子は罪人たちの手に渡される。立て、行こう。見よ、私を裏切る者が近づいて来た」と、決然と言われた。話しておられる内に、12弟子の一人イスカリオテのユダが現れた。彼は、主イエスを売り渡すために、神殿当局の祭司長、律法学者、長老たちの遣わした、剣や棒を持った群衆や衛士たちを引き連れて来た。ゲツセマネは、一行の秘密の集会場であったので、ユダは迷うことなく、この場に来た。深夜のため、「私が接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃さないように連れて行け」と、接吻する相手が主イエスであると打ち合わせていた。来てすぐに、主イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。神殿当局と約束したのは普通の接吻であるが、主イエスにしたのは「熱烈な接吻」と書かれている。彼は力を込め、強く抱きしめたのである。接吻は親しみの愛を現わす行為であるが、その接吻を裏切りの合図にした。ユダは、常人とは違う、屈折した心を持つ人であった。

衛士たちは、主イエスに手をかけて捕らえた。すると、傍に立っていた弟子の一人が剣を抜いて、大祭司の僕に切りかかり、片方の耳切り落とした。この弟子は、ヨハネ福音書では、ペトロであったと書いているが、ありそうなことである。主イエスは衛士たちに、「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。私は毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたがたは私を捕えなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである」と言われた。主イエスは、毎日、神殿の境内で教えておられた。しかし、民衆に支持され、尊敬を集めていたので、当局は手出しできないでいた。また、「祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけない」と言っていたが、ユダの裏切りの申し出によって、祭りのこの時、真夜中の捕縛になったのである。主イエスは、捕縛に抵抗することなく、「聖書の言葉が実現するためである」と言われ、応じられた。聖書の言葉とは、詩編22編16節bの「あなたは私を死の塵に捨て置かれた」やイザヤ書53章7節bの「屠り場に引かれて行く小羊のように」などであろう。人間の罪を負って、十字架で死ぬことを受け入れられたのである。

弟子たちは、主イエスに手がかけられた時、一人の弟子が衛士に切りかかったが、捕縛が確かなこととなると、彼らは皆主イエスを見捨てて逃げ出した。数時間前、「ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません」と言ったのに、四散してしまった。彼らは、主イエスを裏切った逃亡に深い傷を心に負った。